

## 2025 年度第 1 回 職業実践専門課程

### 学校関係者評価委員会・教育課程編成委員会

日 時：2025 年 11 月 26 日（水） 14：00～15：30

場 所：大阪文化服装学院 南館図書室

出席委員

学校関係者評価委員：植田茂和、片岡敏哲、岩光荣太郎

教育課程編成委員：小林義歩、植田茂和（兼）、志貴昌弘、河野あゆみ

学内委員：豊田晃敏、加藤圭太、和田康彦、枚山晶、白倉亮一、眞砂香、下岸貴美子、  
関塚也

欠席委員：糸井弘一（学校関係者評価委員兼教育課程編成委員）、大黒正人（学校関係者  
評価委員）、萩原直樹（教育課程編成委員）

1. 開会のあいさつ
2. 校名変更に向けての取り組み
3. 活動報告（2025 年 4 月～10 月）
  - 産学連携 事例紹介（万博 PJ、TOPPAN PJ、産地訪問研修）
  - コンテスト受賞
  - 特別講義
  - 国際交流
  - 社会貢献・地域貢献
  - トピックス
4. 2026 年 4 月入学出願状況
5. 閉会

\* 資料

- 学校関係者評価委員会・教育課程編成委員会 2025 事業報告書

**【議事録】**

校長より開会の挨拶

## 1, 校名変更に向けての取組み

校長：2026年4月より、現学校法人ミクニ学園 大阪文化服装学院は、学校法人大阪文化服装学院 ヴォートレイル ファッション アカデミーへと校名を変更します。それに向け、ブランディングの一環としてコンセプトムービーを制作しリクルートのメディアやYouTubeを通して公開中、再生回数は1ヵ月で約5万6千回。(この後全員で視聴)  
また、ロゴ入りグッズを制作し、学生・教職員自ら広報活動を行っているほか、全教職員がワークショップを実施し、校内の掲示物を新ロゴに刷新しています。

### 〔委員からの質問・意見等〕

岩光：校名が変更になると違う学校のように思えます。卒業生にも校名変更を広めてほしい。

片岡：校名変更には関係ないかもしれませんが、来年度も本校から入学予定です。

理事長：校名変更で、何か悪影響はありますか。

片岡：それは一切ないですね。かえって好印象です。

校長：就職・採用の視点から見て何か懸念点はございますか。

小林：特に問題はないと思います。インパクトが強くてよいと思います。

志貴：縫製工場を営んでいる身としては、やはり信頼のある校名出身者を求人したい。もっと高校生等へのSNSやメディアに力を入れた方が良いのでは。東京文化と線引きした覚悟は良いと思います。企業側への広報は後付けで良いと思います。今見ましたYouTubeもパッションはあるが中身が無いように思います。一番肝心なものが抜けているような気がします。誰に訴えかけているのかが分かりづらい。

理事長：厳しいご意見ありがとうございます。SNSですが、学校アカウントのSNSでどう伝えていくかと言うことですね。

志貴：コラボをされている中で、アートな芸人やファッションに関心のあるインフルエンサーを使えば、名前の浸透率が速いのでは。当社もそうでしたが社名を変える時のツカミが難しい。

植田：何らかの危機感があって校名変更されるのかと思います。これから色々なことをやっていないといけないと思います。お金の限りもあります。YouTubeの一番の目的は何ですか。

理事長：ヴォートレイルのプロモーションです。世の中に名前を知ってもらうことですが、高校生にヴォートレイルの名前を知ってもらうことが一番です。高校生に向けて作りました。資産に限界もありますので、作り分けは出来なかった。学生のような声を使い、メッセージは学校からのものです。どちらからも共感性のあるものになりました。校名変更を周知するためのプロモーション策については現在も議論しているところです。

植田：どんな体制でここまで変えられたのですか。

理事長：校名変更プロジェクトとブランディングプロジェクトに分けて総動員です。ロゴは外注ですが、その他は自前です。みんなが真剣に考えたものです。

## 2、活動報告（2025年4月～2025年10月）

校長：産学連携の取組みについて前回、糸井様から学生がコラボ等に取り組む中でどのように成長しているかを具体的に聞かせて欲しいというご要望があったので、今回は大阪・関西万博、TOPPAN様との取組み、産地訪問研修について後ほど詳しく説明させていただきます。

### 〔産学連携事例紹介〕

- ・マイナビ TGC in 大阪・関西万博 2025 にて、学生が制作した衣装 8 体がスタイリスト相澤樹さんによって起用される。
- ・大阪高島屋のサステナブルイベント「DENIM SCRAMBLE」に参画。三備地区と連携し学生たちのデザインしたデニムジャケット & パンツを製品化。スタイリングショーも実施。
- ・パリのブランド「バトゥ」 と連携し、サステイナブルアクセサリーの限定コレクションを阪急うめだ店で販売。
- ・伊勢丹新宿店「ピース de ミライ」にて、リーバイスのユーズド商品を使った商品を開発。スーパーデザイナー学科の 2 ブランドがポップアップイベントで展示。
- ・大丸松坂屋百貨店の依頼で、モデルの佐々木莉佳子さんのアップサイクル衣装を学生が制作。「カーボンニュートラルを考える 2025 by SATOYAMA & SATOUMI movement」にて披露。
- ・大阪・長居公園でファッションショーを開催。イタリアのテキスタイル展示会の認知向上と来場促進を目的とした取り組み。
- ・ファッションビジネス学科の学生が大阪の商業施設 EST と連携し、梅田ストリートのトレンドを分析し「夏のどまんなかコーデ」を提案。
- ・企画、商品仕入れ、店舗デザイン、販売までを学生グループが担う約 1 ヶ月間の長期運営ショップを大阪梅田の商業施設 HEP FIVE で実施。
- ・阪急阪神マーケティングソリューションズ(株)との取組みで、梅田で開催された「UMEDA CREATIVE COLLEGE 2025」に参加。スタイリングの写真を展示し、ポップアップショップも同時に行う。
- ・和歌山ニットとコラボし、阪急メンズ大阪・高島屋大阪店で販売。
- ・NY 発老舗靴下ブランド HOTSOX と協業し、東京文化と大阪文化がそれぞれオリジナルコレクションを販売し販売数量を競う取り組みに参加。

校長：この他多彩な取組みを致しております。万博についての取組みは、下岸から報告いたします。

下岸：大阪・関西万博では数多くの取組みに参加したが、その内の2つをご紹介します。

・6月12日～15日、ポルトガルパビリオンにてポルトガル繊維服飾業界のメンバー5社のサステナブル素材を使いドレーピングのライブパフォーマンスを披露。ポルトガルのデザイナーさんとの交流の場に参加。スーパーデザイナー学科3年4年の5名が本校以外のマロニエファッション、神戸文化服装と参加。いろんな文化の違いに触れ大きな学びとなりました。

・大阪ヘルスケアパビリオンでの出展は、去年の4月に制作のキックオフがあり、スーパーデザイナー学科が企画デザインをし、クリエイター学科パターンナーコースがパターンを作り、オートクチュール&舞台衣装コースが縫製し制作したもの。関西の企業17社とタッグを組み4つのゾーンに分け、本校はビリビリゾーンとクルクルゾーンを担当。クルクルゾーンは折り紙スーツ。学生は大きなイベントに参加し忍耐力が付いたようだ。ビリビリゾーンは3Dモデリングでアバターを作り、アバターにモデリングして制作したもの。3Dモデリングは卒業した学生が在籍中に担当し現在の3年生が制作。こちらも卒展制作の励みとなっています。

加藤：大阪商工会議所と関西ファッション連合が取り仕切っているブースで、関西にある企業の素材・技術の良さをどう示すかという展示で、その課題として学生が1グループにつき3チームに分かれて3企画提案、その中から企業が選び制作したものを展示しました。企業の良さをどう伝えるかというミッションが学生にあったので、1年かけて制作したところの成長が伝わってきます。

理事長：SDGsの観点から、自動車の解体事業社や黒染めの事業社がここに絡んでいる。企業のどこを上手く繋げていくか。普段付き合いのない企業同士の接点を取材し、大きな学びとなりました。限られたリソースの中で成果に繋がったのは、大きな成長となりました。

加藤：ビリビリゾーンの白い素材は、お米由来の合成皮革です。これをアピールしたい企業があり、花柄の和服の素材を新しい形で作れるようになったことをアピールしたい企業もあり、一方ではビリケンをアピールしたい企業もあり、3つのテーマを組み合わせて作品にしたものです。

理事長：良い勉強になったと思います。想定以上の来場者があり活気のある展示でした。

校長：以上が万博に関する発表となります。次はビジネス学科1年生の取組みを発表します。

・TOPPAN(株)との産学連携。TOPPANが運営するグラングリーン大阪うめきた広場「PLAT UMEKITA」にて3日間限定で「未来の古着屋」をオープン。ファッションビジネス学科がグループに分かれて全く違うコンセプトの3店舗を運営。コンセプト設計、古着のセレクト、店舗設計、ロゴデザイン、イメージビジュアルやムービーの企画・撮影・編集、当日の接客まですべてを手掛けました。古着は株式

会社ヒューマンフォーラムの協力のもと、廃棄寸前の衣類の中から“掘り出し物”を見つけ、単品販売ではなく3点1000円のワンコーデ販売で付加価値を提供。ファッションのエキスパートがコーディネートを提案し古着に新たな価値を与えました。企画から商品選定、店舗設計や販売まで一貫した取り組みができたことで学生にとってとても良い経験となりました。

続いて、スーパーデザイナー学科2年生の産地訪問研修についてご報告いたします。

・スーパーデザイナー学科2年生は、3年次での「マイブランドデビュー」に向けて、現在グループブランドを立ち上げ、商品を企画・制作・発表・販売するプロジェクトに取組中。来年3月には阪急百貨店にてポップアップイベントを開催予定。その過程において、学生自ら日本の素材産地に直接足を運び、産地独自の歴史や生産背景、各企業の高度な技術や工程、産地開発における差別化要素と強み等を体験吸収し、それぞれのブランド商品開発に生かします。9月から10月にかけて愛知県の尾州（ウール中心）、和歌山県の高野口（パイル織物中心）、兵庫県の播州（綿素材中心）、広島県の福山（デニム中心）の4つの地域を訪ね、工場見学や講義を受け、今の日本の素材について学びました。私も参加しましたが、それぞれの産地に強みや良さがあり、とても勉強になりました。これからの物作りをするにあたり、良い経験ができたと思います。今は、この産地に素材を買い付けに行く段階になっており、今後商品を開発していく状況です。

植田：学科に合わせた事をされており、奥行きが強く出ている。特に産地訪問はこの業界でのJAPANをアピールする事になるのですが、スーパーデザイナー学科以外の学科とはこの知識を共有しているのですか。FAをやるには必要な知識だと思うのですが。

理事長：そこまでには至ってないのですが、クリエイター学科の学生が、産地に赴き素材を買うことはありますし、正式なカリキュラムではないが教員が情報を提供する事はあります。ビジネス学科においては至っていない。ブランドプロデューサー学科という新しい4年生の学科には、物作りの現場を知るうえでカリキュラムに入れていこうとしています。ビジネス学科にはまだ落とし込めていない。クリエイター・ビジネスそれぞれに分けながらカリキュラムを作りたい。

校長：植田さんが仰る通り、ストーリー性があると強みになる。

植田：デザイナーはそれを販売員に伝えようとするのですが、なかなか苦勞が伝わらない。

理事長：ブランディングや物作りとカリキュラムを結び付ける事が出来たら良いのですが。

植田：それが出来ているブランドが強いのです。

小林：産地見学が本当に増えていますね。学生が興味を持っているから続いているんですね。今行っている学生は幸せです。どんどん産地が減ってきているので。日本製を発信したい時がいつか来るのでいい経験だと思います。これをどう授業に落とし込めるかというのが本当に難しい。各企業とのコラボと両方があって良いです。この後は、長繊維と短繊維の差を見せてあげるのも学生の興味が沸くのではないのでしょうか。

理事長：そうですね。次は福井かと。

志貴：どんどん現場に行った方が良いです。響き方が違います。そこが重要だと思います。質問ですが、ファッションビジネス学科の就職先はどんなところですか。

理事長：販売員が多いです。アパレルで店舗を持たれているところ。FAです。

志貴：MDにはならないのですか。

理事長：MDを目指しているのは3年生のブランドマネジメント学科です。しかし着地点はFAが多いです。なぜかと言うと企業の求人が2年生の販売員か、4年生の大学生枠になっているからです。専門士を持っている3年生では大学卒に入っていけない。これを解消するために今回4年生のビジネス学科を立ち上げたんです。せっかく3年勉強しても販売員の受け皿しか無いのが課題です。

志貴：企業側に問題があるのですよね。最近、取引先の商社系アパレルの若手は、良い大学を出て頭が良いが物作りを知らない人が多い。社内で物を作らないところが増えてきているので人が育っていない。専門学校を卒業して少し知識を持った人を育てる余裕がないのです。とりあえず数字をそろえている。小林さんが言われたように産地が無くなってきたり、2次加工屋さんが無くなったり、国内物作りに拘っていると言う割には物作りの背景を知らない人が増えてきているので、問題が起こってきている。4年制ファッションビジネス科を出た人が、産地を見たり物作りの匂いを感じたり、物作りは手間が掛かるということを知るのはとても良いと思います。ユニクロやユニフォームの様な工業的なところはまた違うが。産地を巡って何か知識を得て、物作りが近くにあって仕事をし、グローバルな世界に羽ばたくストーリーがとても良いと思います。

理事長：実際、在学中に商談をしたり、学ぶことは多いです。

志貴：特に職人さんと話すのは良い。

河野：先ほどの産地消ではないが、私は美容室で洋服を売るプロジェクトを進めているのですが、日本の布を提供するときには作り手側に知識が無いというような話なんです。日本全国の細かい工房等の知識が無いので、アーカイブ的に学校が学生のアイデアでコラボして作るような事は考えておられますか。アーカイブがどうなっているのか興味を持ちました。東京文化はされていると思うが、コラボを進めようとしても進まないんです。大阪文化の方がフットワークが軽く御相談できるかと思いました。

理事長：アーカイブまではまだ出来ておりません。毎年産地見学をし、学生が産地の事や作り手・メーカーの事を理解して、それをアウトプットする際に伝えながら自分達のグループで作った作品を阪急スークで販売する事をさせて頂いています。スーパークリエイティブアクトの中で3月にしています。そこでアーカイブ兼販売のカタチを取らせて頂いています。場所的な問題もあるので。

河野：アーカイブで誰かに見せるということではなく、学校に企業が相談すれば物作りの知識やアイデアを得て物作りをする事は可能ですか。

理事長：メーカー側の要望というのは、知識のないアパレルや小売りを我々が産地と繋いで何か物作りや適切な企画やブランディングをするということですか。OEM や ODM 的なイメージでやって行くと言う事ですか。

河野：そうです。

理事長：カタチとしては可能だと思います。アパレルや小売りのニーズによって変わってきますが。産地を絡める目的や意味がないと難しい。

河野：ありがとうございます。別の話ですが、東京ではパーソナルスタイリングを店頭で依頼されることが増えてきています。スタイリストを派遣して店頭でパーソナルスタイリングしながら販売する。そのようなニーズは大阪ではありますか。今後学校の方では取組みのようなものを何か考えていますか。

理事長：関西ではあまりニーズはない。一方では増えていくだろうと思います。それもありまして、スタイリスト学科にビューティ&スタイルコースという新しいコースを作りました。パーソナルスタイリスト育成に重点を置いています。パルのファウンデーションカップで審査員をされていた日本のパーソナルスタイリストの第一人者であるみなみ佳菜さんにパーソナルスタイリストという仕事について講義をしてもらいます。人生経験が無いとパーソナルスタイリストは難しい。その点を考え未来のパーソナルスタイリストを育成しようとしています。

河野：ありがとうございます。みなみ佳菜さんは、研修でお世話になっております。

校長：コンテストの受賞結果をご報告させていただきます。今回装苑賞ではグランプリは逃しましたが佳作を頂きました。また、デジタルアパレルデザインコンテストでは優秀賞を受賞しております。11月には新たなコンテストでグランプリの受賞等ございましたので次回にご報告いたします。

特別講義にも力を入れております。WWDJAPAN の村上要様、レディーガガが衣装として採用する「SOMARTA」のデザイナーである廣川玉枝様、AKB48をはじめ様々なアイドルグループの衣装を担当される茅野しのぶ様、バッグアイテムを中心に展開する「nori enomoto」を主宰されている榎本紀子様等、業界第一人者による講義です。

国際交流といたしましては、フィリピン・ラサール校の学生 30 名、教員 2 名が来校し、当校の Oleg 講師による授業やパーソナルスタイリング講座、着物を取り入れたスタイリング、撮影会等を実施し好評でした。当校の学生も参加した国際交流となりました。韓国・啓明大学は 2～3 時間の訪問でしたが、学生 15 名、教員 3 名が海外現場学習プログラムの一環として来校し、キャンパスツアーを実施しました。

社会貢献・地域貢献といたしましては、12 月 6 日～14 日には、「新大阪・三国アートフェス」に会場の一つとして参加します。子供向けのワークショップの実施、新館空きスペースではマルシェを実施します。特に子供さんを学校に呼んで体験してもらう「アートワークショップ」は、ブランドマネジメント学科 2 年生が地域の皆様と企画から運営までを担当いたします。また、11 月 30 日には大阪・十三の町おこしイベント「トライやる×ホリデー」に参加します。こちらは(株)ウェルビーイング阪急阪神が主催する地域活性化プロジェクト「十三未来会議」から町おこしイベントです。映画「国宝」のロケ地である「グランドサロン十三」にて、スタイリスト学科 2 年生がスタイリングショーをし、スーパーデザイナー学科 1 年生のデザインスカートを展示します。

トピックスとして、この会議の委員である大黒様のご子息であるスーパーデザイナー学科 3 年生の大黒翼君が西淀川区の火災現場で活躍し淀川消防署から感謝状を授与されました。

### 3. 2026 年 4 月入学出願状況

校長：最後に 2026 年度の出願状況ですが、現時点で昨年度を上回っており順調に進んでおります。

以上でご報告を終了しますが、何か御意見・御質問・御要望はありますか。

岩光：資料が見やすく分かりやすかったです。

片岡：たくさんの産学連携、イベントに参加されていますが、学校から企業へのアプローチか企業から学校へのオファーかどちらが多いのですか。

加藤：圧倒的にオファーです。日々、相談メールが来ます。

片岡：学生の成長にもつながり願ったり叶ったりですね。

小林：色んなイベントに参加している学生はとても成長している。おそらく社会人になってからとても役に立つと思います。私も卒業作品展のショーの事や花博で行ったショーの事など今でも鮮明に覚えています。そして社会人になってどこかにそれが生

きています。卒業生の方に学校での経験が社会人になって役に立っていると言う事が聞けたら在校生の励みになると思います。私も学生時代の経験が大きかったです。だから産地見学はとても良いと思います。

植田：逆風の中で素晴らしいです。

校長：本日は大変お忙しい中ご参加いただきまして誠にありがとうございます。引き続き、ご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。

閉会